

年の終に舟を造りて、窮鬼を乗せて流し捨る事あり、夫が日本へうつりて、節分に舟を畫きて、是へびんぼうがみをのせ捨るとて流せしなり、

〔年中恒例記〕十二月晦日 一節分夜、紙にかきたる舟繪伊勢守進上之、女中衆同朋衆迄取調申之、

〔澤巽阿彌覺書〕貞孝之御調進節分御舟繪所は、二兩年前上京、小川扇屋にて被書之説、又其後狩野法

眼弟子に、峠右近と申仁、御被管人御扶持人候、其峠にか、せられ候、又そののち公方様光源院殿○足利義

輝御代に、某福山新五郎時御舟の繪の事、公方様朽木より御上洛、二條妙光寺に被成御座候、其時

貞孝様は、御宿妙蓮寺と申所に御座候、公方様と御臺様は、大引合御舟二ツ、又御造子御所々々様

へ小引上臈中臈御末女までは、杉原に入次第およそ調進、或時節分御伺公候て、御入候へば、御所

御所様の御舟不足にて、俄に福山繪筆以て參れとの御使被下、二條春日御局さま御ゑんにて、不

足の御舟を書申候、彼節分御舟圖、相阿むかしゑづ有、それにて調申候事も候し、

〔安齋隨筆前編十四〕正月寶舟繪 古代の書に、寶舟繪を正月枕の下に敷事所見なし、京都將軍

の頃は、既に此事ありき、澤巽阿彌將軍家同朋、大永、覺書云、貞孝之御調進○中それにて調申候

事も候し云々、貞孝は伊勢守貞孝也、將軍家の政所職也、貞孝より寶舟の繪を獻せし也、○中御

造子は御曹子なり、

〔文晁畫談〕寶船の事略○中 寶船古繪本、嵯川相摸守家藏にあり、これは其先祖嵯川新右衛門親長

入道標が寫せる圖なり、新右衛門、其頃京都將軍政所代、裏書に云、此船寫はせちぶんの夜書せら

れ候御船なり、相阿彌筆寫也、惠林院御代に、進上物の内、歸山祐心母かた祖父巽阿彌進物也、抑も

たせられ候淵玄抄の書を拜見申度候、古繪本を見て、光源院殿様御代貞孝様被仰付、歸山調進申

候、公方様妙覺寺に御座候時、御船不足の事あり、めし使被下、かすがの御局様の御えんにて、五艘

かきたし、御連枝御所々々さまへ上候覺候事此通りゑるせり、